

## 江戸時代における毒の言説と病： 『養生訓』の事例をもとに

大道寺慶子

慶應義塾大学

本研究では、『養生訓』（貝原益軒・1713年）を例にとり、日本の疾病史・医学形成において、「毒」への意識がしばしば重要な役割を担ってきたことを考察する。とりわけ近世から現代にいたるまで、日本の医学文化における「毒」の言説は複層的であり、人々の多様な身体観・病観を照射している。梅毒や中毒といったように、病名や症状そのものを表すのに使われてきただけではない。万病の本になり得ると考えられた胎毒説、そして吉益東洞の万病一毒説から、伝染病を毒の概念で解説した橋本伯寿『断毒論』（1810）まで、とくに江戸時代の毒の言説は多岐に渡る。本研究では、江戸時代の医学書および一般の人々の間に浸透していた、複数の毒論を考察する手掛かりとして、江戸前期養生書のプロトタイプでもある『養生訓』を中心に、病観との相関に着目する。『養生訓』における「毒」の用法は、大きく4分類することができる。(1) 薬物・鉱物・ガスに含まれる有毒の成分を指す「毒」（「夏月、古き井、深き穴の中に人を入れるべからず。毒気多し・巻6」, 「人の不可食物～諸の獣毒箭にあたりたる物、諸の鳥毒をくらって死したる物・巻4」等）、(2) 薬効なども含めて、成分が激烈なことを表す場合の「毒」（「薬はみな偏毒あればおそるべし・巻7」等）、(3) 熱毒、湿毒など体内に鬱し、しばしば熱く膨脹または浸淫する腫物として生じる毒（「癰疽及び諸瘡、腫物の初発に、早く灸すれば、脹あがらずして消散す。うむといえ共、毒かるくして、早く癒えやすし・巻8」等）(4) 飲食物が体内で滞って「毒」に変じたもの（「腹中の食、いまだ消化せざるに、又食すれば、性よき物も毒となる・巻4」等）。これら4種類に加えて、江戸時代に梅毒・痘瘡・麻疹などを含む病の本として恐れられた、胎毒を挙げることができる。益軒は、胎毒については詳しく述べていないが、小児に関することは、香月牛山の『小児必用養育草』を参照するよう勧めている。『小児必用養草』では、出生時のケアの要として、胎毒下ろしについての詳細な記述があることから、胎毒も当然、益軒の認識にあったとしてよい。これらを江戸医学の「毒」言説の主な5つと設定することができよう。

中でも(4)の、体内で滞った食物が、毒に変じるという考え方は、江戸時代の養生書に繰り返し現れ、食べ過ぎを諫める食養生の教えの根幹をなしている。飲食物の毒性の有無を論じるだけではなく、食べ方（暴飲暴食・ナマ物・古いものを食す）によっては、どのような食物も、胃中で腐敗して毒に変じるとされた。こうしたポピュラーな毒論は、様々な解毒タイプの売薬からも窺い知ることができるが、それは医学理論形成とも無関係ではない。例えば万病一毒説を唱えた吉益東洞の毒は、飲食に由来するものと、外邪に感応して病を発症させる、体内由来のものに二分されるが、前者は、食養生の毒観と、後者は、『小児必用養草』の外邪に感応して種々の病を引き起こす胎毒の存在と、類似している。また、体内で生じ、種々の症状を起こす要因となる毒の存在は、形を変えて明治以降にも受け継がれている。例えば20世紀に入ってから、イリヤ・メチニコフ（Ilya Ilyich Mechnikov, 1845–1916）の autointoxication が「自家中毒」と翻訳され、漢方復興期の医学再編の一助を担ったことも、よく知られている。さらには現代のデトックスブームも、生活の不摂生や、ストレスなど、様々な要因から体内に生じ蓄積する毒への意識が根本にある。本研究は『養生訓』に焦点を当て、日本人の病観・医療文化を理解するうえで鍵となる「毒」論を考察する端緒とする。